

黄門桜

匠 瑗 探 訪

167

暖冬の影響で桜の開花が記録的に早まった今年、「黄門桜」も例年より早く満開を迎えることでしょう。

黄門桜は1973(昭和48)年に市文化財に指定されましたが、きっかけはその由来が『飯高寺文書』に記されていたこ

とでした。

水戸藩第2代藩主、徳川光圀は「水戸黄門」として知られ、藩主を退き隠居していた1695(元禄8)年1月、江戸から水戸への帰路、下総の諸社寺に参詣する中で、飯高寺にも立ち寄りました。

黄門桜に関

する記録は1803(享和3)年に飯高檀林が水戸藩に差し出したもので、同藩と檀林とのつながりが記されています。

その中で、1699(元禄12)年春、黄門の御意(お考え)で佐原(香取市)から檀林までの並木道に松と桜を植え、杭(立て札)を設

置したとされます。

他の記録には、佐原から飯高まで約24km、沿道30か村に松と桜を植えさせ、そのお礼が村々に下されたとあります。しかし、それらは「現在(1966年時点)ではほとんど見当たらない」と記されています。

飯高寺の記録では元禄11年11月と同12年2月にも檀林を参詣したとされますが、いずれも伝承の域を出ないと考えられます。この頃、黄門は病にかかっていた、檀林では病氣平癒の祈禱を1700(元禄13)年11月に行っています。翌12月に黄門は亡くなりますが、没後50年ほどして家臣らによる逸話集がまとめられたとされます。

飯高寺の記録も黄門の没後100年ほど経って書かれたもので、他の記録(『佐原市史』)も逸話集などの影響があったのかも知れません。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

問 秘書課広報聴班

☎ 73・0080



昨年4月13日の黄門桜